

学位論文題名

現代日本農民家族における後継者の教育

－北海道十勝士幌町の実証調査を事例として－

学位論文内容の要旨

農業後継者の教育過程は主に二つの側面によって展開されている。家族内で構成されたことと、農民が暮らしている地域社会の中から与えられた環境によって養成されるのである。家族内で行なっている生業－生活過程で、農民の子供の教育、人間成長というものは主に親が持っている思想によって展開されることから始まる。その次は、家族から生み出した教育の土台で外に社会に出会って、色々な面を形成し、社会的文化的発展をもたらしたことなのである。本論文では、地域社会の農民家族における生業－生活過程を中心に、その父親と後継者を対象として、長期間にわたる農業経営及び教育課題を実証的に検討した。

第1部では、農民の家族生業－生活過程が現在の全体社会変動の影響を受けていることと、それによってもたらされてきた諸矛盾、諸問題の位置づけを明らかにし、農業経営の変化に伴って農業や生活に対する彼等の考え方も変わってきたことを検討した。そして、農民の家族生業－生活過程から、農民の「姿」をとらえると、北海道では、伝統農民、兼業農民から、専業農民へと、社会開発の進展に従って変化してきていると述べた。さらに、その変化は単独で生じただけではなく、主にその特定時代にあった社会全体の転換によってもたらされた事であった。この点に関して農村地域の社会構成、後継者の教育、及び近代化した農業が次第に展開されてきたこととの関係等という先行研究をみてきた。そうした中で、農民が家族生業－生活を守り続けたこと、反面、経営規模や色々な機械設備を拡大せざるを得ないこともあったと検討してきた。

第2部では、実証調査を行なった地域である十勝の上幌町において、士幌村の歴史、小作農民で入殖してきた祖先の社会の「姿」、及び士幌村における初期の農業会と農業組合の歩みを調べた。そして、平成3年9月の中旬に予備調査を行い、士幌農業協同組合の役員を訪ねてから、農協が管理している工場の視察をした。ついで、同年11月6日～12日の一週間で実証調査を行なった。それは、士幌農業組合員である父親35人と後継者37人を対象者にそれぞれの家族を訪ね、調査の質問紙を通して面接調査を行なった。第3部、第4部のところで、それによって得た結果の内容分析を検討した。検討した内容については、士幌における農業開発に従事した農民の農業経営、家族生活と両者の知識革新面の三つに分けて検討し、また親の対象者と後継者の意見を比較的な観点で調べた。

(1) 明治維新～大正末にまで：士幌の開拓使時代からずっと、祖父は牧場の奉公や小作人として地主から借りた土地を切り開いて畑か水田を作っていた。当時の生活は貧しいくて、「手」と「クワ」で開墾作業をしながら、田圃や畑を作っていた。所謂、FRONTIERの精神で祖父の考え方は、一生懸命の働けば、ものを取れると意識していた。子供の教育と思われる方法は、自分の働く姿を見せて「見覚えさせる」「手伝わせる」といった伝統的な方法で行なっ

ていた。学校そのものが、殆ど実際に生業—生活をする中では減ったものであった。農民の暮らしにとって自然の厳しい状況や労働に対して人間の力をどれだけ入れていたのかと、「忍耐・我慢」をかけて、生活面には「節約」を切り詰めていたという伝統的な考え方を持っていた。当時農民組織は、まだはっきり形成しなかった。祖父は父に期待していたのは「土地」を大事にして「生業」である農業を守り続けることであった。

(2) 昭和初期～昭和45年まで：父親の代の間に土幌農家の生業—生活の全体が様々な困難に当たった。この時点から地域農業改革事業に伴って、土幌農民は自らで農業組織を創って皆の理解と共同の下で村の農業及び、自分たちの生活を改善し始めた。土幌農業協同組合は、昭和6年に設立した土幌農業会から展開されたものである。不調の天候による冷害・凶作の被害で生活の苦しさ、農民と雑穀商人の間であった借金や不公平な取引関係等の問題を改善しようという強い決心が組合の出発点となった。それから、共同作業や救済運動を受け入れて、村の危機状態を乗り越えた。

ついで、日本経済成長期に入ってから、地域社会の開発計画を始めて、労働力不足、後継者の問題、離農ブーム等家族の困難や、主な農業内容変化、機械導入、土地基盤整備等という「転換期」での様々な対策に、農協側と一般農民の皆が団結して、生業—生活改良を実現していた。その特徴は、村の指導者層を中心に農業改革案を論議して、村民の理解と協力を求めた上で、その提案を実行した。農民の家族困難に対して、当時、村の先頭に立った「太田寛一」組合長、「飯島房芳」町長、と獣医者である「秋島勇」畜産振興会会長の「三偉人」の指導で、新たな機械導入と共に近代農業の経営や技術革新を行なった。さらに、昭和30年に設立した合理化澱粉工場が切っ掛けで、土幌でできた生産物を加工して生産品で販売するという、農業改革事業と地域生活面の改良を目指して努力してきた。つまり、彼等は「農村ユートピア」の理想を持っていたのである。その中で個々の農民家族が行なっている農業も次第に変化した。父と母は拡大した面積で作物の管理、機械管理、肥料の設計等近代的農業方法をマスターするのが早急に必要であった。その故に父親世代は農民と農協の深い関係を続けていた。

後継者の農業教育面については、伝統的なやり方の他に、殆ど皆中学校頃に機械を使った作業を手伝って経験があった。農業は家の職業であり、自分の将来にも関わると、興味や意識を形成するようになった。さらに、地域の農業後継者を養成するために、町、農協及び一般農民で維持していることとして、(1)土幌青年団、及び農協青年部活動と、(2)土幌農業高校を維持している事、(例えば高校振興会、特別農業専攻科開設への努力)、(3)後継者の海外実習対策等を検討した。この段階で、父親の農業観及び生活観で後継者に伝えられるものは、「忍耐と我慢」をすることだけでは、農業の利益が取られないのである。父親が期待することは、主に「安定できる」農業経営で、親自身より近代技術と経営面を身に付けることなのである。

(3) 昭和45年以降の土幌農業は、「後継者の代」に入った。従って、近代化した農業開発の計画と方針は、徐々に国際的農業競争の「枠」に入ってきたのである。農民の生業—生活がその段階でまた、農業事情の激変に影響を受け、あらゆる側面で経営指針を変化せざるをえない。特に、家族に新たな矛盾や問題を生じたのである。その転換が大きく起きたのは、土幌農協の運営と方針が(1)生産の向上と(2)資本蓄積を目指して、国内外農業経営を拡大してきている。そのために、土幌農協は個々の農民家族が係っている問題を改良するより、経営の拡大事業に力を入れたという。いわゆる「企業的」農協の姿が出てきた。一方で、後継者は家族の労働単位で一生懸命に働くという現象はまだつづく。そのために、経営主であるような立場となった彼等はいっと知識革新に努力を進めなければならない。即ち、生産増大とコスト削減をするために、高校や農業特別専攻科から得た経験で、家族経営の計画に利用ができるように頑張っている。例えば、機械修理、土壌分析、肥料の設計等を実験しながら、農協や他の経営者集団との交流

をしている。しかし、農産物の価格不安定や生産コストの増大で多くの農民は、農協からの期待や強制的な方針に中々追いつかない。また、負債の固定化、家族員の健康問題、子供の教育問題、等について各層の農家は、殆ど悩みや不安を続けている。この次点で農業経営と家族生活に対する、後継者の考えは、かなり伝統的なやり方とは違って、「生業」を営む以上に農業経営を行なっている。つまり、後継者の代になって、農業生産の拡大、品質の向上に対応して進めないと、自分が担っている家族農業の「安定経営」を確保できない。

専業農家の家族生活面では、後継者夫婦が重労働に関わっていないが家事分担を、父と母に手伝ってもらう。仕事に関しては、「嫁」が家族農業経営にかなり重要なパートナーとなった。家内で行なった教育過程でいうと、後継者は、子供に農業を続けて欲しいが、特別では「強制しない」の傾向である。つまり、教育そのものに対して、自然のように個性を見いだしていく。将来でも自分で判断力を持って、農業を自主的に選択して欲しいと願っている。

(4) 以上のように検討して諸面を、現在の土幌農民は機械の個人化を進めると見られた。彼等は、「自己的」で、経営者の小さな集団をいくつか作っている。その意味で、農協と部落内にある農事実行組合との結びつきから離れたがる傾向にある。そして、土幌の地域開発を支えてきた皆の理解と共同、協力、その「質」は、「農民的農協」の代わりに企業的農協が登場してきた後、農民と農協の間に大きな「壁」ができるようになった。また、このような新たな転換について、「開運部落の変化」を事例として検討した。

後継者の教育プロセスは、土幌農民のように地域開発プロセスの2側面が形成された。その一つは家族の生業—生活過程、及び地域社会についている農業や開発の「見直し」が形成された。もう一つはそれについてある「限界」に係っている。今後の教育過程であるものは、地域社会の枠内だけではなく、外部との諸関係で様々に形成される可能性がある。これは、農民社会の開発過程がもたらされた後継者教育の一つの「エピソード」が見られた。

本論文のまとめに当たっては、これまで分析して、検討してきた内容を、四つの項目にして要約された。それは

- | | |
|--|--------------------------------|
| (1) 土幌農民の自ら設立した農業協同組合、 | (FARMERS' CO-OPERATIVE BODY) |
| (2) 土幌農民の指導者層が実現した、農村ユートピア (ALTERNATIVE SOCIETY) | |
| (3) 土幌の開運部落の変化 | (CHANGED COMMUNITY OF KATUN) |
| (4) 土幌農民の代々に伝わる農業の「質」 | (FARMERS' NEW CULTURE) |

という内容で本論文をしぼったのである。そして、研究者の国でこれから「タイ」の農村開発計画に、様々な側面で参考にできると思われる。

学位論文審査の要旨

主査 教授 高村 泰雄
副査 教授 小林 甫
副査 助教授 須田 勝彦
副査 助教授 青木 紀

学位論文題名

現代日本農民家族における後継者の教育 —— 北海道十勝士幌町の実証調査を事例として ——

本論文は、北海道十勝地方・士幌町の農業専業地域における農民家族の生活史（「祖父」「父」「後継者」）との関連において“後継者の教育”の代代的構造を問題とし、かつ現に農業生産の第一線にある「後継者」層の父祖とは異なる新たな資質を、社会的諸関係の変容の中で解明しようとした。その構成は、第一部・序論、第二部・士幌町の背景とその開発過程、第三部・実証調査、第四部・考察、である。第一部は先行研究の検討で、日本の「伝統農民」「兼業農民」「専業農民」の生産－生活過程を歴史的に把握し、ついで北海道の大規模専業農業を構築してきた農民層の「思想、その自発的な考え」を、地域社会の発展との関わりで把握した。“後継者の教育”あるいは“後継者自身の「教育過程」”は、地域社会の形成史の中で把握すべきだからである。第二部は地域社会史の検討に当てられた。

第三部・実証調査では、社会学的実証調査に基く後継者の教育過程の分析が、「父」の代と「後継者」の代との対比においてなされた。士幌町立高校の農業特別専攻科卒業生を対象とした農民層の家族レベルの分析（家族状態と専業農家の新たな文化）、個人レベルでのそれ（生産－生活の現状把握と展望）、開運部落を対象とする部落レベルでの問題把握である。こうした分析を通して、以下の諸点が解明された。第一に、父の代は、自家と部落内から受け継いだ伝統的方法と、地域農協の運営や指導を介しての近代的方法によって、大規模化農業への転換期に立ち向かい、家族の困難を乗り越えた世代である。第二に、そこから、後継者に対する期待（財産を守る、農業に自信を持つ）が生まれ、かつ後継者への要望（技術・判断力の形成、時代に合わせた経営、品質向上）が出された。他方、幼少時からの家の手伝い、高校段階での自主的選択、高卒後の地域活動による知識・経験の蓄積、高校や地域活動を通しての配偶者獲得、という「教育過程」を辿ってきた後継者は、第一に、さらなる経営技術革新を志向する「個人経営主」的性格を持つ。彼らは、父の代とは違って、農協に対する信頼に「壁」が生じている中で、機械利用の個別化や個人経営者相互の小集団形成を通して、自営者として経営できる「人」たらんとし、個人の経営力を向上させる「組織」を求めている。第二に、家族生活問題の改善（健康への配慮、生活の楽しみ）、子育てにおける柔軟さ（子どもの能力や興味に基づく自発的な農業継承）、という「新たな生活観」を生みだしている。

第四部・考察では以上の諸結果が、内発的発展の視点から総括された。①士幌地域社会は「農民自らで構成してきた社会」であり、「農民の自発的組織」としての農業協同組合が、地域産業開発と地域青年教育の鍵を握る組織として基軸に据えられる。現在の「企業的農協」の革新が重要となる。②農民層の自らの「社会」形成にとっては、農民的農協のリーダーが有した資質（広い社会的視野、先見性、犠牲的精神）のみならず、農民自身の「自発的思想」、「次世代へ伝える『質』」の発展が重視される。それが地域の生活文化・学校教育の確立と係わる。③道立移管せず、農協の援助の下に近代化された町立高校は、農業特別専攻科をも設置して地域社会に貢献した。その卒業生は、学校時代、ホーム・プロジェクト方式による“卒業論文”の作成によって、自家農業への見直しと展望を得たし、卒業後も教師・友人集団との連携・協力を行之、自家農業ならびに青年団・農協青年部などの諸活動を展開し得た。そこに、「祖父」・「父」の代との違いがある。

本論文の根底には、タイ国の地域開発主体の自発的形成という課題意識が存しているが、ソンベツ氏は安易な比較論に陥ることなく、十勝農民の実相を事実即して把握した。その結果、第一に、地域農業の史的展開と関わった、農業後継者の教育の一つの形、家族・農業高校・農協の一体的教育システムと、そこでの個々人の「教育過程」を解明し得た。第二に、かかる教育システムの中における学校教育の独自の役割を、現時点から意味づけ直すことによって、教育社会学と教育方法学とを媒介するカリキュラム論の視点を切り開いた。第三に、地域社会の枠を超えた“開かれた社会”に生きる「孫」の代に対する後継者教育は、既存システムの単なる延長線上にあるのではなく、新たなシステムの構築が課題であること、カリキュラムを含む学校教育過程の内実転換を必要とすることを明示した。

こうした貢献によって、審査員一同は、本論文提出者 チャイソクラン・ソンベツは、博士（教育学）の学位を受ける資格があるものと認定した。